

目次

寄稿: アメリカの大学から日本の大学院へ (山本 嘉孝)	1-2	特集: オックスフォードとケンブリッジとデザイン学 (重本 祐樹)	6-7
寄稿: 悩むwannabeグローバル留学生 (村瀬 俊朗)	3-4	寄稿: アメリカでアートを学ぶ (根石 美和)	8-9
学科紹介: ネズミの進化と腸内細菌 ～カリフォルニア大学バークレー校～ (鈴木 太一)	4-5		

寄稿: アメリカの大学から日本の大学院へ

The University of Tokyo
山本 嘉孝

読者の皆さんの中には、日本の大学から米国の大学院への進学を考えておられる方が少なくないかと思うが、私はその逆で、米国の学士課程から日本の修士・博士課程へと進んだ。今回、「アメリカから日本へ」という進路選択、及び日本国内の研究環境について紹介するよう寄稿のお誘いを頂いた。私個人の経験と専門分野に偏った無駄話となってしまうそうだが、何かの参考となれば幸甚である。

江戸時代のカンシブン?!

現在、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化分野の博士課程に在籍し、日本近世文学を専門として、江戸時代の漢詩文と儒学を研究している。江戸時代の日本において、《外国語》である漢文・漢詩の読み書きが如何なる方法・目的のもとに学習されていたか、その多面的な実態を解明したいと考えている。17～19世紀の日本漢詩文と儒学については



Fig 1. 左から、山本北山『作文志毅』(安永八年<1779>刊)、貝原益軒『文訓』(享保元年<1716>序)、ともに筆者架蔵本。その質感を含め、このような江戸の書物に惚れてしまった。

先学の優れた研究が多く備わるが、まだまだ取り上げられていない文献も山のように残されており、歴史・文学に関する現行の認識を強く揺さぶる可能性を秘めた魅力的な領域だと思う。文学研究とはいえ、その手法は歴史研究に近いため、史料を発掘し、解読する能力がモノを言う。現在の指導教員のもとで研鑽を積みたいと考え、日本で院生生活を送り始めて今年で5年目になる。今年度は、都内の大学で日本文学の非常勤講師も務めさせて頂いている。

雨のち紆余曲折

小学校の2年間を父親の転勤のためマレーシアで過ごし、インターナショナルスクールに通った。日本に帰国し東京の中学に通っていた時、模範解答のおおむ返しだけの教育に疑問を感じ、米国のボーディングスクール(寮制高校)を受験した。単身渡米しPhillips Exeter Academyに3年間通った後、ハーバード大学に入学、政治学を専攻するつもりが、ある英文学の授業に感銘を受け、文学を専攻することに。Literatureという名の比較文学の専攻学科で、20世紀の米英仏独の文学理論(特に世界大戦の記憶について)を中心に勉強し、2008年に卒業した。

アメリカの大学院で比較文学の勉強を続けたいという気持ちはあったが、具体的なテーマ設定に迷いまくった。そこで、まずはギャップイヤーのような形で、文学と懸け離れた分野で2年間ほど就労経験を積んでみよう、米系投資銀行の日本法人に就職した。文弱な自分を改善したくて武骨な業界に入ったが、考えが甘すぎた。金融に関する知識も興味も全く持ち合わせておらず、日本の上下関係のあり方も理解していなかった私は、最悪な新入社員

だった。

1年未満で退職したが、その後間もなく、二つの重要な出会いがあった。一つは、マルセル・ブルーストに関する評論を通読する中、中村真一郎という昭和の作家の著作群に出会ったこと。二つ目は、現在の私の指導教員、ロバート・キャンベル先生との出会いである。

注釈をめぐる改心劇

中村真一郎による(フランス文学を介した)江戸漢詩文理解について研究したいと思い、キャンベル先生のもとを訪ね、東大・比較文学比較文化の修士課程を受験した。その時点ではまだ、日本で修士課程を終えた後、アメリカの博士課程に進もうと考えていた。人生初の日本語による入学試験だったが、比較文学の試験だったため、アメリカで学んだ欧米の文学理論に基づく解答でも構わず、先生方も私の海外経験を肯定的に捉えて下さり、有難かった。

実際に入学してから驚いたのは、海外出身の同級生の多さである。高度な日本語能力が入学の条件であるため、中国、韓国、台湾出身の院生が多かったが、ブラジルやアメリカからの院生もいた。彼らを前に、日本語が母語である私は「海外の高校・大学に通っていたので分かりません」などという言い訳を心に思い浮かべることさえ憚られた。これは自らを律する上で有難いことだった。

そして肝心の勉強であるが、それまで経験したどんな勉強よりも難しく感じられ、慣れるまで非常に苦しかった。欧米中心の世界観で生きて来た私が日本・中国の古典文の読解に窮するのは当然として、それ以上に、研究手法が私の慣れ親しんでいたものと大きく異なっていた。ここで私が初めて体験したのは、いわゆる注釈型の研究方法で、同時代の文献と照らし合わせながら本文の言葉の意味を厳密に考証し、歴史的事物についても一次資料まで遡って精査した上で、詳細な注釈を施すという作業だった。

アメリカの大学の専攻学科では「言葉の意味は永久に固定できない」「歴史的事実は真には検証不可能である」といった、20世紀文学・哲学に影響されたアナーキーでニヒルな過激思想が普通に信奉されていたため、ここに来て衝撃を受け、また心が洗われる気がした。それまでは俯瞰的な研究にしか関心がなかったが、研究の真髄は細部にこそ宿るということを痛感した。

巨人の肩をお借りします

そうこうしている内に、修士2年生となった。修論では江戸漢詩文そのものを取り上げるよう軌道修正した。まず江戸漢詩文を研究しなければ、中村真一郎の江戸漢詩文理解を研究できないし、そもそも自分の関心が真一郎よりも江戸に向いていることに気づいた。専門分野も日本近世文学に決めた。やっと生涯をかけて取り組みたいものに出会えた、と思った。

それで、アメリカではなく日本の博士課程に進学することを決断

した。その理由としては、キャンベル先生の指導を受け続けたいということ、江戸時代の書物・文献が多く残る日本国内に留まりたいということに加え、国内の研究環境に大きな魅力を感じていたこともあった。

修士1年目から、米国のボストン美術館とホノルル美術館所蔵の江戸・明治期の書物を調査する科研プロジェクトに参加させて頂いた。繰り返しボストンとホノルルに出張し、多くの江戸・明治期の書物に触れながら、何人もの日本の他大学の近世文学専門の先生方とご一緒させて頂くことにより、日本全体における日本近世文学の学界が如何に活発且つ健全であるかを早くから肌で感じ、その末席に寄せて頂きたいとの願望が生じた。

ここで注記したいのは、日本国内の日本近世文学研究者コミュニティに存在する師弟関係・上下関係についてである。外からは閉鎖的で威圧的な空間に見えるかもしれないが、私が実際に経験してきている師弟関係・上下関係とは、年少者が年長者に盲従することではなく、むしろ年長者が責任を持って年少者を教導する、という《徳》のメカニズムそのものである。

日本では、人文系も理系同様に修士課程修了後から学術誌に論文を投稿し始め、一人前の研究者として自説を世に問うていくことが求められる。これも手伝ってか、少なくとも日本近世文学について言えば、学界全体が若手の育成にとっても積極的だと感じる。先学先人、いわゆる「巨人の肩」の大きな存在を常に感じながら、新しい知見を開いていこう、とする今の研究環境が、私は好きである。また考え方や研究手法にも、個人によって微妙な相違があって、時折論争が起こるのも興味深い。

修士課程の間は、投資銀行時代の貯金を学費などに充てたが、ある先輩の導きによって、日本学術振興会の特別研究員制度に応募して採用され、博士課程では生活費・研究費が支給されることになった。これも重要なステップだった。

この他、古書の探訪、様々な研究会、海外の日本研究者とのコラボ、就職のことなど、触れておきたかったことは多々あるが、紙幅が尽きた。またの機会にお話できればと思う。



Fig 2. 来日した大学時代のルームメイトと、都内の寿司屋でプチ・リユニオン中

山本 嘉孝
東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻
比較文学比較文化分野 博士課程

寄稿: 悩むwannabeグローバル留学生

私はUniversity of Central Floridaの産業組織心理学科で博士を取得し、現在Georgia Institute of Technologyの心理学部でポスドクをしています。例えば私の海外生活も、すでに17年目を迎えるようとしています。1997年に軽い気持ちで留学しようと思い、準備もせず短大(Community College)に入学しました。当時は、四年ぐらいで帰国する予定だったので、それならばといるんなところに住むことに決めました。結果として、一年ごとにカリフォルニア州内の大学間で編入を繰り返し、最終的に短大を三校、四大を二校、その後の修士課程で別の大学に行き、博士課程はポスの移動に伴い編入をして二校、現在のポスドクも二校目になります。今年の八月からはシカゴにある大学に教員として赴任するので、十一校目の大学になり、無駄に長い海外生活を送っています。

産業組織心理学とは？

産業組織心理学は(Industrial/Organizational Psychologyが正式英語名称、以下は略しI/O)、企業や組織に関する様々な現象を、心理学理論を活用し紐解く応用科学になります。代表的なトピックは、採用や企業の従業員をどのようにトレーニングを行うか、またはリーダーシップや企業文化がどうパフォーマンスに影響するかなど、多岐に渡る現象を研究します。心理学の分野ですが、世間一般で想像される臨床心理学というよりは、分野としては経営学に非常に近くなります。博士課程の卒業生は、大半がコンサルティング、一般企業、総合研究所、または政府系機関に就職し、後の学生は大学に残り研究や高等教育を志しています。

I/Oの進化の歴史において、米国軍が非常に大きな役割を果たしてきました。第一次世界大戦時、米国軍はどのように潜在能力の高い兵士を選別し、また適切な職務に割り当てる方法を模索していました。初期の産業組織心理学者は、個人の性格的な特徴差に着目し、兵士のトレーニングやパフォーマンスは性格に影響されることを発見したことで、米国軍に大きく貢献しました。現在でも多くの産業組織の学者や研究機関等は、様々な形で米国軍と密接に研究活動を行い、分野発展に貢献しています。私の所属する研究室も、US Army Research Institute等の、米国軍関係の研究機関のサポートを受け、チームやリーダーシップ等の研究を行っています。

また、一般企業においても、I/Oは大きく貢献して来ました。特に企業の採用、昇進、解雇における研究は目覚ましく、学会誌の研究結果や研究者との協議を元にして、企業採用等に関する法令や条例が定められるケースもあります。企業の採用環境も日本と違い、日本的な一括採用や長期的社員研修は基本的には行いません。そして、日本のように総合職やポテンシャル採用より、特定の職位への採用が一般的になります。このような採用環境においてのI/Oの分野にはいくつか課題が上がっています。例としては、人種差別や性差別を採用するプロセスをどのように改善するか、表面上の

個人差(人種等)にとらわれず、どのように職務に関係する本質的な能力を測定し、公平な採用判断を下すことができるかなどです。多くの産業組織心理学者が、これらの課題を解決して社会貢献する事を目的に研究活動を行っています。

留学する意味とは？

みなさんは研究以外の留学目的に、「国際化」や「グローバル化」等が含まれるのではないのでしょうか。最近の日本では、グローバル〇〇や国際〇〇、更にはスーパーグローバル〇〇という言葉をよく目にします。留学を考えるにあたって、将来は英語を流暢に話し、外国人研究員と交渉し研究するなどの華やかな理由もあると思います。留学の理由やイメージの多くには、華やかな物が付き物だと思います。しかし、留学には華やかなイメージとは別の側面があります。多くの留学生が経験する実際の留学は、もっと泥臭く、日々の日常で精神的タフさを要求してきます。ここでは、現在留学を考えている方に向けて、泥臭い留学の側面や海外で「生活する」ということを、無駄に長い海外経験を元に語らせて頂きます。

日々の生活にある苦労は、国内の大学院に残る選択をすれば今までの延長戦上にあります。しかし留学では、研究面だけではなく日々の生活も大変になると思います。むしろ一番の苦労は、大学外の、研究以外の日々の生活の中にあると言っても過言ではありません。

留学を考えるに至って、大学の研究だけではなく、留学先でどのような「生活」を営みたいのか考えることも重要だと思います。仮に将来、一流大学院から入学許可を受け、更にその大学が都心部にあれば言うに越したことはありません。しかし、米国はほとんどが田舎です。付け加えて言うならば、多くの一流校は田舎、特にど田舎にあります。もう一つ付け加えると、米国のど田舎は日本と違い、都心部へのアクセスが非常に不便で、日本食も手に入り難い場合もあります。人種の偏りも出てきます。こんなど田舎にいて国際化できるのか!?と悩む時期もあるでしょう。

そして生活もシンプルに大変になります。「めっちゃ」悩んでしよう。英語を喋れなければ、研究プロジェクトでは子供扱いされたりもします。授業の聞き取りも大変で発言もできない、クラスのグループワークやプロジェクトもきっと大変なはず。冗談を言って笑いを取るのも一苦労です。恋愛面でも苦労は尽きません。特に男性は大変です(笑)。将来の結婚相手も外国人か日本人か考えるかもしれません。そして、博士課程が徐々に終わりに近づくと、海外に残るのか、帰国するのかでも悩みます。

たぶん海外では何処で生活をして、国内では考えられない苦労の連続です。常に自身の価値や存在意義が揺さぶられ、その中で自分を見失わぬよう踏ん張って生きていきます。こんな悲観的な苦労話ばかりしていますが、自分としては、この苦労こそが留学の醍醐味だと思っています(ちなみに僕はマゾではありません)。

国内に残ったら体験できない苦勞の連続が、自ら人生の羅針盤を持つよう努力を促し、自分とは何者を考えさせ、将来のキャリア設計を意識的に行わせるのだと考えています。そして、ラボや米国社会での様々な人種、文化的価値観、宗教観に触れることで、今まで構築した価値観を大きく見直す転換期にもなると思います。この「苦勞」の中にこそ、日本では得難い「国際化を促す人生の肥やし」が隠れているのではと、漠然と考えています。

繋がり

海外で暮らすと、何かと周りの助けが必要になります。学部の頃は、英語も拙い自分が仲間と会話するには周りの忍耐力が必要で、自分の英語が上手になるよう手助けをしてもらうことが重要でした。大学院に入れば、研究室の仲間に英語の添削をもらい、ボスにも生活費のサポートをもらいました。海外で出会った日本人の方には精神面では本当にお世話になっています。もちろん、母国で生活しようが海外で生活しようが、人との繋がりが一番重要だと思います。しかし、特に海外生活では、常に外国人という立場なので、この思いがいっそう強くなるのかもしれない。苦勞

は現在でも尽きないのですが、この苦勞を乗り越えた先にある、人種を超えた人との繋がりが、留学をして経験する最大の魅力だと考えています。

この苦勞を買ってでも留学をしたいと思っているあなたは、将来の留学先で困難があっても、きっと笑って乗り越えられるのではないのでしょうか。



2012年秋の研究室の集合写真。筆者は右上。

村瀬 俊朗
Georgia Institute of Technology Postdoctoral Fellow
2014年8月よりシカゴのルーズベルト大学 助教授

学科紹介: ネズミの進化と腸内細菌 ～ カリフォルニア大学バークレー校 ～

カリフォルニア大学バークレー校、生物学のPhDプログラムに在籍している鈴木太一です。日本で学部を卒業後、アリゾナ大学大学院で4年間(MasterとPh.Dの一部)過ごし、2013年夏からカリフォルニア大学バークレー校のPh.Dプログラムに編入しました。腸内の微生物が哺乳類の生態や進化にどのように影響を与えているのか野生のネズミを使って研究しています。この記事では、学科紹介、研究紹介、米国大学院留学の魅力について書かせてもらいました。

1. 学科紹介

カリフォルニア大学バークレー校の統合生物学(Integrative Biology)はEcology and Evolutionary Biologyの分野で全米1位にもランキングされる名門です。大きな特徴の一つに、この学科は5つの博物館(脊椎動物学、考古学、昆虫学、植物学、植物園)を統合(integrate)するためにつくられた学科であるため、幅広い施設や頭脳が揃っています。例えば自分は哺乳類や鳥類の標本で埋め尽くされた脊椎動物学博物館のフロアの中にオフィスがあり、一つのオフィス内も同じ研究室のメンバーではなく、他の研究室のメンバーとごちゃまぜに配置されているため、研究のアイデアも自然にintegrativeになるという仕組みです。数々のノーベル賞受賞者を輩出したLawrence Berkeley National Laboratoryも目と鼻の先です。

最新の研究発表を聞けるセミナーが毎日キャンパスのどこかで行われているのも特徴です。学科が他大学の研究者を招いて

主催するセミナーが集に一度、学科内の分野ごとのセミナーも定期的に行われ、それぞれの博物館も週に一度セミナーを主催しています。学生も月に一度チョークトークという黒板を使ったカジュアルな発表会を行っています。これはお菓子や飲み物を飲みながら、黒板と小道具だけを用いて、面白い発見や研究アイデアを交換する場です。一年中學會が行われている感覚です。

バークレーの街はヒッピーで有名でもあり思想がとても自由です。そのせいかうちの学科のPhD卒業条件はとても簡素で、2学期以上のTA と2つの必修科目(進化学とTAのための授業)があるだけです。進級試験も教授4人と3時間の口頭試験のみです。卒論も自分が発行(publish)した論文をホッチキスでとめて卒業することが認められています。卒論発表(Defense)もオプションであるというのだから驚きです。他の大学院と同様、学費と生活費が支給されるTA (Teaching Assistant)は5年間保障されています。研究費や学会の旅費などをサポートする奨学金も充実しています。

これはバークレーに限ったことではありませんが、アメリカの5年間のPh.Dプログラムの特徴の一つに、好きな研究テーマを探す時間を与えてくれるというのがあります。例えば、クラスを履修させたり、所属外の研究室で小プロジェクトを行ったり、担当教授と異なる研究をすることがオリジナルだと評価される傾向があります。反対に、ヨーロッパのPh.Dプログラムは3年間と短いので、所属研究室の先生に研究テーマを与えられ、クラスを履修することは稀で、研究技術を学ぶことに重点を置くと聞きます。これはアメリカの2年間のMasterプログラムも同様の傾向があります。研究

テーマをじっくり模索できるのは、アメリカのPh.Dプログラムの魅力の一つかもしれません。

2. 研究紹介

腸内に住んでいる細菌が動物の生態や進化にどのように影響を与えているのか研究しています。例えば、細菌がヒトやネズミの肥満の原因になりえることが知られています。現代人にとって肥満はあまりうれしくないことですが、野生下に住むネズミにとって脂肪は冬を越す大事なエネルギーです。実際に寒い地方に住むネズミの方が、暑い地方に住むネズミより体重が重いことが知られ、適応進化であると考えられています(ヒトも寒い地方の先住民の方が暑い地方の先住民より体重が重いことが知られています)。



Fig 1. 筆者(写真中央)とワナを仕掛けさせてもらった農家の方々

腸内の細菌が食べ物を効率よく分解することで動物の脂肪蓄積を促進し、動物の適応進化を手助けしているのではないかとこのことを調べています。

どうやって調べるのかというと、砂漠の地アリゾナ州から、極寒のカナダまで車で2ヶ月間のネズミ捕りの旅に出かけました。研究対象のハツカネズミは農家や牧場で捕れるので、ドアをノックして周り、ピーナッツバターを使ったワナを仕掛けさせてもらい、捕まえたネズミは野外で解剖し、モコモコ煙のでる液体窒素に臓器を保存し、キャンプサイトにテントを張って寝泊まりするという生活を送ります。無料の害獣駆除のようなものなので農家の人も喜んで協力してくれます。研究室に戻ると腸内の細菌をすり潰してDNAを取り出し、遺伝情報を読み取り、どんな細菌がいるか調べます。少なくともアメリカの東海岸のネズミや世界中のヒトのデータからは、寒い地方の動物ほど肥満に特徴的な細菌が多く見られることを見つけました。

我々と我々の腸の中にいるたくさんの微生物はなぜ共生することができるのか学ぶことで、地球上の生物多様性がどのように維持されているか解明するヒントになるのではないかと毎日ワクワクしながら研究室に通っています。

3. 米国大学院留学の魅力

自分が米国大学院留学の一番の魅力だと感じたのは留学先で出会う人間と困難の質と数です。世界中から同じ情熱をもった人間に数多く出会い、議論し、切磋琢磨できる環境は刺激的です。例

えば、それぞれの国の奨学金を背負って留学してくる留学生とも競争するわけですから、いきなりオリンピックの世界に飛び込んだ感覚です。分野外で出会う人間もまた日本ではなかなか出会うことのない人間ばかりです。例えば、日本人であるというだけで大学留学している若い日本人の学部生から企業派遣で日本から研修にきている社会人まで、年齢、国籍、社会的ステータスに関係ない



Fig 2. 研究室メンバー

交友関係の広がりも忘れてはいけない留学の大切な魅力の一つです。

「目の前に二つの道があるなら難しいほうを選べ」という父親の言葉に押されて、日本で学部を卒業してからすぐにアメリカに渡りましたが、最初の一年は困難の連続でした。よくわからない土地でよくわからない分野をよくわからない言語で勉強するわけですから、しばらく劣等生です。それでも、その困難を乗り越えると、科学を英語で理解できるようになり、厳しい環境でも生き抜ける知識、度胸、スキルが身につきます。簡単に一番をとれる環境で成長することは難しいです。なかなか一番をとれない環境こそが人間を成長させるのではないかと思知らされました。

新しい出会いや困難をマンガの主人公のように楽しめてしまう精神があれば、大学院留学は人生において価値のあるものになると信じています。

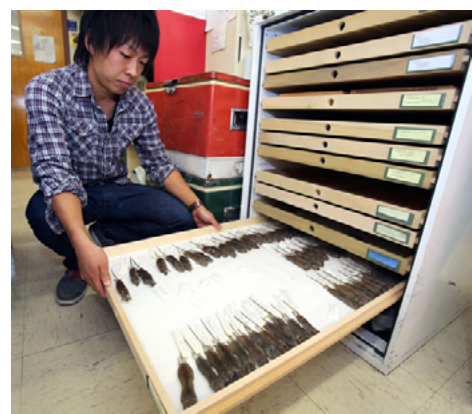


Fig 3. 筆者(写真はArizona Daily Starより提供)

鈴木 太一
University of California Berkeley
Department of Integrative biology &
Museum of Vertebrate Zoology

特集: オックスフォードとケンブリッジとデザイン学

The University of Cambridge
重本 祐樹

博士課程一年目も残す所わずかとなって参りました。英国の夏は日照時間が長く、気候も穏やかな日々が続きます。6月も中旬、学年末試験を乗り越えた学生たちは、ケム川で行われるボートレースに始まり、庭園パーティ、そして大祭典と、一年で大学が一番盛り上がる季節を終え、各々の帰路についています。英国の初夏の緑葉は、日本の桜の様に、この国の学府の一年の終わりを象徴するようです。

英国留学中の私が米国大学院学生会へ寄稿させて頂くのは少々恐縮ではありますが、たまには違った世界観を楽しんで頂ければと思いつつ、筆を走らせています。私の所属しているケンブリッジ大学、および修士課程で所属していたオックスフォード大学での生活、そして専攻分野であるデザイン学について、しばしお付き合い下さい。



Fig 1. 筆者の所属するセルウィンカレッジ(ケンブリッジ大学)

オックスフォード大学とケンブリッジ大学

英語圏最古の大学であるオックスフォード大学、次点のケンブリッジ大学は、併せてオックスブリッジと並び称され、その創設をそれぞれ12～13世紀頃に遡ります。その歴史の長さゆえ形成された固有の制度、独自の伝統、豊潤な学識は、オックスブリッジを英国内は元より、世界でも他の大学とその色を異にしたものになっています。

両校を最も特徴づけるのが、世界でもこの二校しか採用していないカレッジ制度です¹。実はケンブリッジの町の何処を探しても、“ケンブリッジ大学”はありません。ケンブリッジの市街地には、31の“カレッジ”と呼ばれる学寮が乱立しており、それぞれのカレッジはマスター(校長)が統治し、図書館に食堂、保健室や礼拝堂等も完備し、一つ一つが独立した教育機関として入試を実施、同時に学生寮としてケンブリッジ大生の生活基盤になっています。

それらのカレッジ群を“大学機構”が統括し、総称して、ケンブリッジ大学と呼ばれています。

カレッジでの教育は、反芻を通じての知識の定着や、思考力の育成を目的とした少人数の議論形式で行われ、大人数の講義や実験は各“学部”で実施されます。多様な専攻の学生がひとつ屋根の下で暮らし²、3年間の勉強の集大成である学位試験に合格する事によって、各カレッジを通じ、大学機構から学位を与えられます。つまり、オックスブリッジでは、学生はいずれかのカレッジの生徒として、そこで生活しながら個別教育を受け、学部で授業に参加し、学位は大学から授かる、という図式になっています。このカレッジでの個別教育と学部横断的コミュニケーションこそが、オックスブリッジの学生の思考力や発想力の根底を支えていると言っても過言ではないと思います³。

さて、オックスブリッジには制度のみならず、“伝統”と言う名のもうひとつの規律があります。例えば、フォーマルホールと呼ばれる晩餐会では、学生はガウンの着用を義務づけられています⁴。また、オックスフォード大学では、ガウンに加えスーツに白蝶ネクタイ、手に学帽を携え、胸にカーネーションを差す、というオックスフォード生の正装で試験を受けなければなりません。カーネーションは、試験初日は白、中日はピンク、そして最終日には赤い花と決まっており、これには「白い花卉を赤く染め上げるほどに、血が滲むほど勉強をして学位試験に臨め」というメッセージが込められているそうです。



Fig 2. 学位試験2日目終了後(オックスフォード大学)

学風に関しては、非常にざっくり述べても、人文学のオックスフォード、自然科学のケンブリッジといった所でしょうか。卒業生の顔ぶれを見ても、オックスフォード出身者には著名な政治家や思想家が多く、ケンブリッジは世界でも屈指のノーベル賞受賞者輩出

1. ダラム大学が類似の制度を取っており、見方によっては3校とされることもあります。
 2. 特定の学部生が決まったカレッジに行かなければならないということはありませんが、カレッジによって伝統的に得意とする分野が異なるので、例えば医学部生に人気のカレッジや、哲学部の学生を好んで入学させるカレッジ、といった傾向は存在します。
 3. カレッジ制度については、最近では詳しく書かれた書籍やウェブサイトも多数観られるので、更に興味のある方は、それらをご参照いただければと思います。
 4. ガウン着用の伝統の有無は、各カレッジの裁量に委ねられています。

校です。社会科学に関しては、ちょうど人文科学と自然科学の中間に位置するような性質上、両校とも得意とする領域や、同じ分野でも異なった視点からのアプローチを持っているなど、多様性が感じられて非常に面白いです。

学問だけでなく、スポーツや行事ごと盛んです。英国のエリート教育とは、「よく学び、よく運動し、よく遊ぶ」、この実践だと私は考えています。大学は学問を納める場ですので、もちろん第一義は勉強、しかしそれに加えて部活をしている学生も少なくありません。また、先に挙げたフォーマルホール、ブラックタイ(タキシード)でのパーティなど、社交性を磨く場も多くあります。そうした大学生活を通じて、全人的な教養が身に付くのだと思います。これは日本の文武両道という言葉にも通ずる所があります。日本の高校までの教育および部活動と言うのは大変素晴らしいシステムで、大学入学時点では日本の学生もオックスブリッジの学生に全く引けをとりません。なので、是非とも大学では学問にも全力で取り組み、遊びや課外活動に、その生活を謳歌して欲しいと思っております。



Fig 3. 両大学における一年で最大のスポーツイベント、夏のポートレース(筆者は後ろから2人目)(ケンブリッジ大学)

日英の大学での経験を通じて見えて来た両国の教育に根付く精神性は、大変興味深いものです。この辺りについて、是非とも勧めさせて頂きたい本が三冊あります。『自由と規律』(池田潔著)、『武士道』(新渡戸稲造著)、『男の作法』(池波正太郎著)、いずれも日英それぞれの“道”と“粋”を見事に描いており、読書が好きな方ではない私ですが、一息に読了してしまいました。時間がありましたら、是非ご一読下さいませ。

デザインとは

私の専門はデザイン学です。日本で耳にする機会はあまり多くはないかもしれませんが、折角の機会なので少し“デザイン学”についてご紹介させて頂きます。

デザインと聞くと、モノの形や色を連想したり、また、大学でデザインの研究をしていると言うと、毎日アトリエで何か作っている様なイメージを持たれる方も少なくないのではないのでしょうか。しかし、デザインは単にモノの外観だけにあらず、ましてや才能ある芸術家のみ領域にあるものでもありません。それはむしろ哲学的思想、緻密な計算、文化的経験などによって支えられ、社会の中の

問題に対する回答を見出し、洗練し、具現化する、創造的で社会的な営みであります。様々な要素、側面を併せ持つデザインですが、私はとりわけ、ものづくりにおけるデザインの役割を科学的に検証、分析することを目的として、日々文献を読んだり、フィールドワークに出かけたりしています。具体的には、機能設計、ユーザーインターフェイス、意匠整備といった、ものづくりにおけるデザイン概念の分類および体系化、ならびにそれぞれのデザイン側面の持つ潜在的インパクトの測量手法の確立と、測量基準の設定が関心分野です。これらのデザイン概念の明確化および定量化による、デザイン戦略を組み込んだ組織マネジメント、およびデザイナーの役割を基軸とした経営戦略の提案、といった領域へ将来的に繋がられることを期待しています。

目下は、人の感情を定量的に測定する心理学の手法を応用し、インダストリアルデザイナーがモノを作る際に意図していたコンセプトを、製品の外観情報を通じて消費者はどの程度正確に読み取る事が出来るのか、また、コンセプトを正確に理解してもらえるモノをデザインできるデザイナーと、そうでないデザイナーの違いは何なのか、という研究をしています。今後は、現在の研究を発展させ、“消費者をより惹きつけるようなメッセージ性の強い製品を、どうすれば作る事ができるのか?”という問題に取り組んで行く予定です。

デザインは、とりわけこれからのものづくりにおいて非常に重要な役割を持っていると信じています。今後の日本の産業、経済、持続可能性の発展のためにも、より多くの皆さんにも是非デザインに目を向けたり、デザインを学問したりする機会を一考して頂きたく、この手記がその契機になれば、大変嬉しく思います。

今これを読まれている方と、数年の内にケンブリッジ大学でお目にかかれる事を期待し、拙稿の締め括りとさせて頂こうと思いません。それでは、またどこかで。



Fig 4. 旅行先、イタリアのため息の橋の前で休憩中に

重本 祐樹
The University of Cambridge
Ph.D in Engineering, Design Management Group,
Institute for Manufacturing, Department of Engineering

大学のプロフィール: <http://www.ifm.eng.cam.ac.uk/people/ys402/>

寄稿: アメリカでアートを学ぶ

きっかけ

私は、アメリカ・オハイオ州の東に位置するケント州立大学にて2年間の修士プログラムに通い現代アートを研究しています。まずは、私がどういった経緯を辿ってケントまで渡ったのかをご紹介します。

私はごく一般の都立高校を出た学生で、英語と美術が得意分野でした。小さい頃から図工教室に通ったり、外国人と積極的に友達になるのが好きでした。そこで芽生えた夢が、日本以外の国で教育を受けることでした。高校を卒業するにあたり、大学は海外へ出たいと志願していましたが確実な情報を準備することができずに日本に留まることに決め、新潟大学の教育学部芸術学科に進みました。いつか海外でアートを学ぶことができるようにと、費用を節約したかったらでもありますが、実家から離れて生活することに早く慣れ、独りで海外へ飛び出していける良い準備にもなりました。大学3年生になり、芸術に対する疑問や意欲が強まるにつれ、外国の大学院に進むことを目標として考えるようになったのが、ついに日本を出るきっかけとなりました。



Fig1. ニューヨーク研修で現代アーティストの作品を鑑賞中

日本の芸術教育とアメリカの芸術教育

日本での芸術教育と言えば、美術史から伝統工芸、西洋画そして現代アートと、日本の伝統文化と西洋の美術が並立しているため、専門分野も多岐に渡ります。古代美術からピカソやゴッホといった近代芸術について学び、卒業すれば美術の教師か、一般企業に進むことが日本の美大生には多いケースなのではないでしょうか。私が通っていた新潟大学では地域貢献を目的とした、芸術を通しての町おこしなどが主に企画されていました。美術館や画廊を離れた芸術をプロデュースすることが、より多くの人々と芸術を関わらせることができる手段として注目されています。しかし、伝統でなければ美術館にも展示されない、この“現代アート”が日本人にとって理解するのに“難しい”ものであると捉えられているのは言うまでもありません。そこで日本に馴染みのあるものを取り入れる芸術家や、伝統工芸を守る働きかけなど、日本では伝統が今でも

強く“芸術”として意識されているのがわかります。

一方アメリカで芸術を学ぶとすると、伝統的な技術や美を意識する歴史的な芸術が存在する傍ら、アイデアや社会に対する疑問といった、コミュニケーションを芸術として表現することが求められています。自分の表現したいように芸術を楽しむことが、独自性を生み出す手段として、またひとりの芸術家として活躍していくためにも必要なこととして教育されているのです。

こうしたことから、現代の流行を追いながらも伝統と芸術を切り離すことのできない日本と、流行を発信することに重きをおくアメリカでの芸術の親しみ方には大きな違いがあり、両方の国で芸術家を目指して勉強することには多くの混乱が伴うと感じました。技術的な観点が重視される日本から、アイデア重視のアメリカの芸術文化に慣れるのに、多くの実験と失敗を繰り返しました。“アート”と“芸術”の違いが文化の違いと相重なる所があり、世界がそれぞれ持つ文化によって芸術や思考も多様であることを強く思い知りました。日本での芸術が今、芸術以外の分野と協力して地域貢献などに力を入れている傍ら、アメリカではアーティスト個人が作品を発信し、ギャラリーまたは公共の場で作品を展示、販売するのが近代から変わらず続いているのが伺えます。

ケント州立大学

ケント州立大学での大学院生向けの授業は、主に現代で活躍するアーティストについて学びながら、私たちが今この時代にどのような意見があるのかを作品を通して表現することを目的として成り立っています。2週間に1度、作品講評があり、学期に約4作品ほど制作をします。場所が確保できれば展示を行い、学期毎にはニューヨークやシカゴ、ヨーロッパへの研修旅行もあります。また、大学院生にとって特別なことは、教授との距離が学部生と比べて一気に縮むことだと思います。教授が大学院生に提供できる情報は限りなく、より具体的に社会に応用していける糸口を共有してもらうことができます。



Fig2. 初めての展示にて、彫刻とファブリックの講師と一緒に(大学院生と講師・教授は学部生よりも近い存在)

ケント州立大学には3つのギャラリーがキャンパス内に設置してあるほか、町のダウントOWNにもギャラリーを所持しており、学生が展示をする機会を多く設けています。他には、アメリカ国内での

コンペティションの数々に積極的に応募することで、学生もプロも構わず、作品次第で展示の機会を得ることができます。私はケントへ来てから、5回の展示機会を得ることができ、経歴を重視する日本の芸術活動とは相反する傾向に驚きと喜びを覚えながら、日々新しい作品作りに挑んでいます。

メッセージ

アメリカに留学すると、自分が勉強している事以外のものからも多くの刺激を受けることができます。日本での生活や人間関係、いろいろな事がアメリカでは異なった働き方をしているので、自分にとって普通であったことがそうでない時や、どう人と慣れていくかなど考え過ぎてしまうことも多々あります。しかし、アメリカでは人それぞれの目標を尊重する考え方があるので、他からの干渉も少なく自分のやりたいことを好きにだけ貫いていくことができます。同じ目標を持った者同士では年齢も経歴も関係なく、お互いに助け合っていくことができます。

例えば教授や他の講師とも、授業以外の時間であっても会って情報交換をすることが気軽にできるので。積極的に動くことが自分に必要なことを得られる一番の近道であり、更に次へ繋がる一歩となると思います。日本から出てみたい、と思ったその時が動き

出すチャンスです。経歴や不得意な事に悩まされることなく、自分ができることをぐんと伸ばせると同時に、苦手なことともちゃんと向き合う貴重な時を体験できます。そんな留学をより多くの日本の学生が体験し、自信を持って歩んでいけることを願っています。

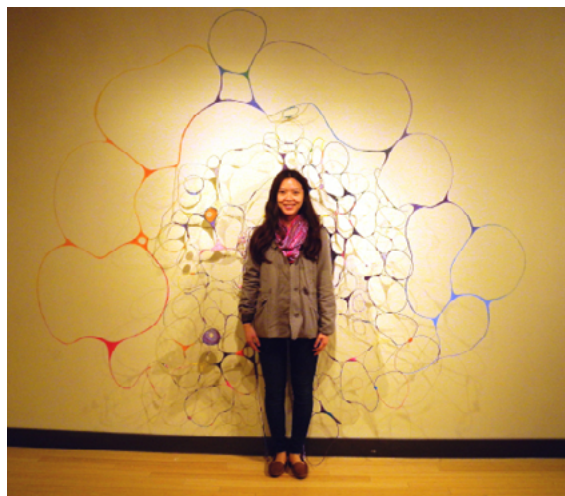


Fig 3. 2014年5月に行った展示にて、自分の作品と。

根石 美和
Kent State University School of Art
Master of Fine Arts, Sculpture
<http://miwa-neishi.olympic.in/>

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平
山田 亜紀 辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

現在、カリフォルニアのLawrence Livermore National Laboratoryという国立研究所で夏の間だけインターンをしています。あと残す所1ヶ月となりました。中西部とは違って、天気が全く違います。30度超えても、全く蒸し暑くないので、そこまで苦しくはありません。また、1時間もすればサンフランシスコ(ベイエリア)にいけるのですが、サンフランシスコは寒いです。夏も20度中頃くらいで、風が強いです。ジャケット必須です。天気も違うのですが、自然も豊かです。東に3時間くらい行けば、ヨセミテ国立公園があって、すっかり虜になってしまいました。

ハイキング・キャンプなど自然に触れ合うこともできれば、景色(滝・岩・Sequoiaという巨大杉)を眺めたり観光的な要素もあって、ぜひオススメなスポットです。ミシガンからカリフォルニアまで来る時に、自分の車でドライブしてきたのですが、途中でコロラド・ユタ・アリゾナなどにある国立公園に寄ることもできました。8月末に帰るときもドライブで帰ります。アメリカ横断に関しては、いつか記事で書いてみたいと思っています。(原)

ロスに来て三度目の夏ですが、相変わらず期待を裏切らない清々しい気候です。七月はサッカー三昧の月になってし

まいましたが、八月と九月はとにかく博論に集中しようと思っています。ここで言っておくと更に頑張れる気がするので。。。 (山田)

日照時間の長いカリフォルニアの夏は植物を扱う僕にとっては忙しい季節です。夏の終わりに日本に帰る予定ですが具体的なタイミングは植物の成長次第。早くサンプリングできるまで大きくならないか。科学がより高い予見可能性の為に日々進歩している一方で、それを突き詰めるための実験が気まぐれな植物の成長に根ざしていることに哀愁を感じる今日この頃です。(辻井)